

# 退職によせて

## 退職に寄せて

生体歯科補綴学分野 魚 島 勝 美



私は平成13年11月から新潟大学歯学部にお世話になっており、22年が経過しました。それまで2～3年をサイクルとして色々なところを転々としていた私ですから、当初はこれほど長くお世話になるとは思っていませんでした。先ず旧第二補綴学分野（クラウンブリッジ）の助教授として着任し、野村修一教授の下でクラウンブリッジに関する教育を担当させていただきました。また、当時歯学部歯学科のカリキュラム改編が年次進行の2年目でしたので、3年生の歯型彫刻実習を歯の形態学という新科目として再編し、5年生の空き枠を使った総合模型実習の開講に向けた準備に着手しました。更には当時各大学で始まっていた教員教育（FD）を所掌する委員会委員長を拝命し、ワークショップ形式の宿泊研修を教員全員に対して実施しました。突然現れて前例のないことを言い出した私を受け入れていただき、サポートしていただいた多くの先生方、特に自ら進んで飛んで火に入っていた齋藤功先生、小野和宏先生には本当に感謝しております。また、WS開催に関する大先輩である東京医科歯科大学（当時）の俣木志朗先生にも何度も現場でご指導いただき、感謝しております。

その後旧第二補綴での約2年間を経て、平成16年に歯科総合診療部の教授を拝命しました。新潟に異動する前には教育専門部署に所属していましたので、当時未だ教育活動に対する評価が低かったとはいえ、私としては歯科の臨床教育を専門とする立場には違和感がありませんでした。ただ、この時一番大変だったのは歯科医師臨床研修の必

修化です。平成8年からの10年間の臨床研修の努力義務を経て、平成18年から義務化されたのですが、大学としてどのような対応が必要なのか、定員をどのように設定するのか等、厚生労働省側も対応が遅れていた中で大変苦労しました。全国の総合診療部の先生方と毎年の歯科医学教育学会の折に会合を持ち、厚生労働省の専門官もお招きして情報交換をしたりもしました。病院の予算と厚生労働省からの要請に乖離があって定員のやりくりも大変でしたが、当時の病院長であった宮崎秀夫先生にもご理解とご協力をいただき、何とか軌道に乗せることができました。どうも有難うございました。

私としては、総合診療部で骨を埋めるつもりでしたが、当時の学部長の前田健康先生のご努力もあって補綴学教育を担当する分野が再編され、有床義歯を専門とする野村先生と並んで補綴学分野の教授を拝命し、分野名を生体歯科補綴学分野としたのが平成20年6月のことでした。以来、副病院長や副学部長として色々なことを学ばせていただきました。副病院長としては外来移転に関して当時の齋藤力歯科担当総括副病院長と頭を悩ませ、副学部長としては海外の歯学部との協定締結、学生の海外派遣、国際関係の各種申請書作成等、大変なことも沢山ありましたが、今となってはとても良い思い出です。

私が常に目指したのは、後進の育成です。当分野担当の教育プログラムは多岐にわたりますが、これら全てで従来の方法を大きく変えたのもそういった考え方に基づきます。また、国際化に向けた活動も然りです。大学人としての立場からは研究も非常に重要なので、それはそれとして私も努力してきました。ただ、後進の育成に熱心でない組織は必ず衰退する、というのが私の考えです。ですから、新潟大学歯学部として、歯科界として私たちが担うミッションを常に意識してきたつもりです。

これまで歯学部、教室員、大学院スタッフ、同窓会や歯科医師会の先生方等、多くの方々にサポートしていただき、何とか無事にゴールできそうです。ただ、これは私のゴールであって、組織のゴールはまだまだ先にあります（逃げ水の如く

永久にゴールなどないと言った方が正確でしょうか?）。これまでお世話になった多くの皆様にはこの場をお借りして心から御礼申し上げます。新潟大学歯学部の今後益々のご発展とご活躍を祈念しております。どうも有難うございました。



## 素晴らしい出会いに感謝！

組織再建口腔外科学分野 小林 正 治

1983年に新潟大学歯学部を卒業し、第一口腔外科に大学院生として入局してから41年の歳月が経ち、教授として11年間の在任期間を終えて、この度無事に定年退職を迎えることができました。肩の荷が下りて、ホッとしたというのが正直な気持ちです。

私は、学生時代に口腔外科学の講義を聴き、口腔外科医として生きていきたいと決意して口腔外科の世界に足を踏み入れたのですが、この年齢になるまで大学に在籍するとは、露程も思っておりませんでした。

入局してすぐに、中島民雄教授から「君の研究テーマは、顔面形態の三次元分析になったから。方法は確立しているから、あとはやるだけだよ」と言われました。確かに指導教官であった上田健先生の頭の中には方法論が出来ていましたが、それを形にしなければなりません。本研究は、2方向から撮影された顔面写真から透視変換を応用して軟組織上の測定点の三次元座標値を算出し、顔面形態を評価するというもので、当時発売されたばかりのNEC社製PC-9801Eというパソコンを用いて解析ソフトのプログラミングから始めました。この頃は、私の脳も若く、バグを直す

ために常に頭の中でプログラムが回っていました。この研究では2編の論文を作成しましたが、コンピュータグラフィックスの進歩は目を見張るものがあり、われわれは早々にこの研究から撤退しました。しかし、この研究が基で私の主たる専門分野が顎変形症になりましたので、私の人生を決めた研究でもあります。中島先生には、私の研究マインドの基礎を養成していただいたと感謝しております。

私が42歳の時に、中島先生の後任として東京歯科大学から齊藤 力教授が着任されました。正直に言うと、齊藤先生と専門が完全に被る私は居場所がなくなるのではと危惧していましたが、齊藤先生には上手にすり合わせをしていただきました。また、齊藤先生が日本顎変形症学会の理事長に就任され、私も幹事として診療ガイドラインの策定や実態調査など様々な事業のお手伝いをさせていただきました。この経験を通して広い人脈を得ることができ、私も人として成長できたと感謝しております。

退職にあたり、素晴らしい師、先輩、同僚そして後輩に恵まれ、望外の幸せな人生を送らせていただき、感謝の念に堪えません。最後に、新潟大学歯学部がますます発展し、優秀な人材を輩出していくことを祈念して、退職の言葉とさせていただきます。長年、お世話になりました。ありがとうございました。



中島民雄先生、齊藤 力先生と

## 退職に寄せて —歯学部で過ごした半世紀—

新潟大学大学院 歯科矯正学分野 齋 藤 功



昭和53（1978）年4月に新潟大学へ入学して以来、歯学部生として6年間、大学院生として4年間、そして教員として35年以上、合わせて半世紀近くを歯学部で過ごしてきました。幼少期より歯科医師になりたいと考えていましたので、歯学部に入学できたことはとても嬉しかったのですが、まさかこれほど長期間にわたって歯学部にお世話になるとは思ってもみませんでした。いろいろな方々との出会いや巡り合わせで、歯学部において定年まで仕事をさせてもらえたことは本当に幸運でした。どちらかというと言きっぱい性格なのですが、中学から本格的にはじめたサッカーと大学院生時代から現在まで専門としてきた歯科矯正学・矯正臨床については飽きることなく興味を持って取り組んできました。矯正歯科治療は新たな形と機能を創り出す創造の医療で、予後の把握と適確な対処法を見出すには継続した研鑽が不可欠である、と身をもって体験したことから長年に渡って携われたのだと思います。

大学院修了後、昭和63（1988）年4月助手（現助教）に任官（当時は国家公務員）され、1996年に歯学部附属病院講師となり、平成16（2004）年10月1日付で医歯学系（医歯学総合研究科・歯科矯正学分野）教授を拝命しました。教授就任時に立てた目標は、邂逅を大切に矯正歯科の基本的知識と技術を兼ね備えた人材を育成すること、臨床に即した大学ならではの基礎的・臨床的研究を遂行すること、そして新潟大学の特色である連携医療推進に寄与することの3つでした。就任後5年、10年、15年と節目の年には、これらの目標がどの程度達成されているか、不十分な点はどこなのかを自問自答し、少しでも前に進められるよう励んできました。

就任当初より、当分野へはすべて大学院生とし

て入局してもらいました。その結果、19年間（2023年3月31日現在）で66名（含：国費留学生10名）の学位取得者を出すことができました。これは、医局員はもとより基礎系・臨床系他分野の先生方からご協力、ご支援をいただけたお陰ですが、本学のみならず他大学から多くの卒業生が当分野の門を叩いてくれたことは驚きであり、かつ有難いことと思っています。また、臨床系大学院生は博士号の取得のみならず専門領域の資格取得も目指して入局します。矯正歯科領域では、2008年より日本矯正歯科学会認定医の育成に関わる研修・審査制度が厳格化しましたが、当分野からはこの制度発足後15年間（2023年11月20日現在）で41名の認定医を輩出することができました。したがって、人材の育成においてはある程度の成果を挙げられたと自負しています。研究においては、大学院生および若手医局員の豊かな発想によって継続して成果を公表し、2007年度から今年度に至るまでの16年間、連続して学会賞、学術奨励賞、論文賞あるいは優秀ポスター賞などを受賞することができ、第三者からも一定程度の評価をいただけたものと思っています。連携医療の実践については、口唇裂・口蓋裂の治療管理や顎変形症に対する外科的矯正治療において、口腔外科を中心とした他診療科（室）と協働して症例を蓄積するとともに臨床研究の推進を図れたことで、治療結果の質が向上し地域から信頼される医療の提供に寄与できたと考えています。

翻って、教授就任直後から暫くの間、大学の在り方や歯学系の各種制度は変革期にありました。たとえば、就任半年前の平成16（2004）年4月1日、国立大学は国立大学法人へ移行、平成17（2005）年～18（2006）年にかけて医療系大学間共用試験の必修化、さらに、平成18（2006）年に歯科医師臨床研修の必修化がなされました。新米教授として種々の制度改革には戸惑うことも多々あり、教授を拝命した当初の営みを振り返ると紆余曲折、悲喜こもごもといった形容があてはまります。しかし一方で、教授という立場に立たせていただいたお陰で、学会活動や公的会議をとおして他大学の多くの先生方と交流し視野を拓けられたことは大きな財産であり、19年以上にわたる教

授としての生活を振り返ると総じて楽しいものでした。教授（教員）として心がけてきたのは、孔子が言うところの「夫子の道は忠恕のみ」でしたが、果たしてこれまで接してきた学部生、大学院生の人たちがどう感じていたかはわかりません。

最後に、これまでお世話になったすべての方々

に感謝申し上げますとともに、新潟大学歯学部がさらに魅力ある学舎として繁栄することを心から願っています。

(2023年11月20日記)



主管校として開催した第82回日本矯正歯科学会学術大会（会期：2023年11月1日（水）～3日（金）、会場：朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター）閉会后における医局員との集合写真。定年退職最終年度に、学会理事長と大会長を兼務という貴重な体験をさせてもらったことも幸運でした。

## 退職に寄せて

口腔保健学分野 吉羽 邦彦



本年3月末をもちまして、新潟大学大学院教授を定年退職することになりました。1988年3月に新潟大学大学院歯学研究科を修了し、1989年1月に新潟大学歯学部附属病院・助手（第1保存科）として採用されて以来、教員として35年の月日が経ちました。大半は歯科保存学第一教室（う蝕学分野）に所属しておりましたが、縁あって、2018年10月から口腔生命福祉学科の専任教員として、主に歯科衛生士養成教育に携わってまいりました。

歯科衛生士臨床実習のコーディネーターを2020年4月から担当することになりましたが、この年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が急速に拡大し、4月7日に最初の緊急事態宣言が出されました（～5月25日）。そのため、医歯学総合病院の外来診療はほぼ中止となり、4年生（14期）の病院実習も4～6月の間、完全停止を余儀なくされました。この間の各診療科ローテーション実習は代替課題にての対応となり、このまま臨地実習なしで卒業できるのかと心配しましたが、幸にも制限が徐々に緩和され、目標の実習ケース数を全員がクリアすることができました。病棟実習については、その後も立ち入りの制限が続いておりましたが、2023年5月8日、感染症法上の「5類」に引き下げられ、現在はほぼ感染症発生前の実習形態に戻っています。

口腔生命福祉学科における歯科衛生士教育では、臨床講義、基礎実習、相互実習、そして臨床（臨地）実習を含め多くの授業で、医歯学総合病院・各診療科の歯科医師、歯科衛生士、看護師の皆さんばかりでなく、言語治療室や歯科撮影室のスタッフなど様々な職種の皆さんにご指導頂いております。さらに、訪問歯科診療の学外実習では歯科診療所の先生にご指導頂いております。今後ともご協力とご指導のほどよろしくお願ひいたし

ます。

さて、口腔生命福祉学科に異動するまでは主として歯学科の教育に携わり、保存修復学ならびに歯内療法学に関する講義・実習、および臨床実習を担当しておりました。また、歯学科では5年次に臨床実習前の共用試験（CBT、OSCE）が実施されていますが、加えて2020年度より6年次の診療参加型臨床実習の評価としての共用試験（Post-CC PX）が正式実施となりました。Post-CC PXは臨床実地試験（CPX）と模型を用いて臨床能力を評価する一斉技能試験（CSX）の2つから成ります。本学では2016年度から同様の試験をそれぞれACKPIS、ATeSTとして実施しており、両者に合格することが臨床実習修了の要件となっています。

私は、臨床実習終了時のATeSTに使用する模型の策定に参加し、また試験の評価に従事しておりました関係から、本学のCSX実行責任者を担当することとなりました。2019年度のトライアルを含め本試験の実施にあたり、試験の準備、監督や課題評価を担当頂いた多くの先生方、ならびに学務係職員の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。

研究に関しては大学院入学以来、一貫して「歯髄保存療法」に関連した研究に携わっております。歯髄の創傷治癒・修復象牙質形成メカニズム、各種覆髄材に対する生体反応などについて、イヌ、サル、ラット、そしてヒトを対象として様々な実験を行ってまいりました。学位論文は水酸化カルシウムによる組織の石灰化機構に関するもので、その後、覆髄部直下に形成される石灰化層が象牙芽細胞様細胞の分化に重要な役割を果たしていることを明らかにしました。現在、覆髄材として広く使用されているMTA等のケイ酸カルシウム系材料についても、その生物学的特性は水酸化カルシウムと類似しており、同様の反応が認められています。

また近年、失活した根末完成永久歯に対して根の伸長と幅径の増加を期待した「再生歯内療法」が注目されています。米国歯内療学会（AAE）は、本療法に使用する根管消毒剤の一つとして3Mix（3種混合薬剤）を推奨しています。3 Mix

療法は1990年前後に本学の歯科保存学第一講座と口腔細菌学講座との共同研究によって開発されたもので、当時、私も覆髄材への応用の可能性について検討を行っておりました。その3Mixが現在、世界的に脚光を浴びているのを目の当たりにして、感慨深いものがあります。

さて、口腔の健康と全身の健康の関連性が明らかにされ、健康寿命を伸ばすために口腔健康管理（口腔ケア）が重要であることが認識されています。現在、生涯を通じた歯科健診（いわゆる国民皆歯科健診）に向けた取組も推進されており、今

後、口腔ケアのプロフェッショナルとして特に歯科衛生士の役割が益々重要となると思われます。歯学部学生の皆さんには、これからの歯科保健医療をリードするとともに、時代の潮流や社会の変化に柔軟に対応できる歯科医師・歯科衛生士として活躍されることを期待しております。

最後になりましたが、これまでお世話になりました全ての方々に感謝申し上げますとともに、新潟大学歯学部の益々の発展を祈念しております。長い間ありがとうございました。

